

職幹旋した。於菟は上京後、坂崎斌の家に住み込み通勤していたようである。その後、絵入自由燈新聞社に移り校正係りとして働いている。女性が新聞社社員として働くのは、我が国では初めてであったという。

のち義姉妹の約を結ぶまでになる景山英子も明治十七年十月頃に上京、坂崎斌を訪問した折、初めて於菟と知り合いとなった。

三 於菟と景山英子の絆

富井於菟と景山英子の交友については、福田(旧姓景山)英子著『妾の半生涯』28頁に於菟に関する詳しい記述があるので次にやや長文になるが紹介しておく。

「於菟女史 富井於菟女史は、播州龍野の人、醬油屋に生れ、一人の兄と一人の妹とあり。幼より学問を好みしかば、商家には要なしと思ひながら、母なる人の丹精して同所の中学校に入れ、やがて業を卒へて後、其地の碩儒に就て漢学を修め、又岸田俊子女史の名を聞きて、一度その家の学婢たりしかど、同女史より漢学の益を受くる能はざるを知ると共に、女史が中島信行氏と結婚の約成りし際なりしかば、暫時にして其家を辞し坂崎氏の門に入りて、絵入自由燈新聞社の校正を担当し、独立の歩調を取られき。我國の女子にして新聞社員たりしは、実に於菟女史を以て嚆矢とすべし。斯くて女史は給料の余りを以て同志の婦女を助け、共に坂崎氏の家に同居して学事に勉めしめ、自から訓導の任に当りぬ。妾の坂崎氏を訪ふや、女史と相見て旧知の感あり、遂に姉妹の約をなし生涯相助けんことを誓ひつゝ、万秘密を厭ひ善悪ともに互に相語らふを常とせり。左れば妾は朝鮮変乱よりして、東亜の風雲益急なるよしを告げ、此時此際、婦人の身また如何で空しく過すべきやといひけるに、女史も我当局者の優柔不断を慨き、心私かに決する処あり、いざさらば地方に

遊説して、国民の元氣を興さんとて、坂崎氏には一片の謝状を遺して、妾と共に神奈川地方に奔りぬ。実に明治十八年(一八八五)の春なり。兩人神奈川県荻野町(荻野村)に着し、其地の有志荻野氏及び天野氏の尽力によりて、同志を集め、結局釀金して重井(大井憲太郎の変名)・葉石(小林樟雄の変名)等志士の運動を助けんと企だてしかど、其額余りに少なかりしかば、女史は落胆して、此上は郷里の兄上を説き若干を出金せしめんとて、唯一人帰郷の途に就きぬ、旅費は兩人の衣類を典して調へしなりけり。」

この記述は、於菟の出生から明治十八年大阪事件の資金調達のため相州荻野村へ景山英子と来村したことが述べられている(後述)。しかし資金調達は十分達成できなかったため、於菟が一旦郷里に帰郷し、兄に資金の協力依頼するまでが記されている。

ここで於菟と景山英子との関係を知る上で、景山の生い立ちを述べておきたい。この景山英子(戸籍は英)に関する研究はすでに優れた研究報告が多数なされおり、生涯にわたる概要を知ることが出来る。景山は慶応元年(一八六五)十月五日備前岡山の野田屋町(岡山県岡山市)で生まれた。父景山確は備前藩の祐筆、母楳子は備前藩士浦田重兵衛の三女。英子は四人兄弟の第三番目、明治二十六年(一八九三)頃福田友作と結婚。昭和二年(一九二七)五月二日、六十三歳でその波乱に満ちた生涯を終えた。その一生について今回の趣旨ではないので先学の諸論文を一読されたい。

明治十七年十月二十九日、自由党が解党され、旧自由党左派の大井憲太郎らは朝鮮の独立運動(独立党)を支援し、これによって事大党政権を支持していた清国と日本国の緊張関係を作り出し、内治改良(国内改革)の实行を迫るといふ計画を企てた。英子は、この朝鮮改革計画を大井憲太郎や小林樟雄から聴き、実行計画に参加することとし必要な資金募集、爆発物運搬係等として活動

することを決意した。こうした英子の影響もあり、於菟も二人で資金募集活動に参加する事になった。この計画は未然に大井等多数の関係者が大阪・長崎で逮捕(明治十八年十一月二十三日)されたことから大阪事件という。

四 荻野村への資金調達

大阪事件のおよそ一年前、相州愛甲郡一町二十数村で地租軽減運動が繰り広げられ、明治十七年十一月租税軽減願書が大蔵卿松方正義に提出された。愛甲郡下の農家は米・麦・養蚕を主な収入源としており、松方デフレ政策により農家経済が大きな影響を受けることとなった。このため地租軽減署名運動が展開された。この請願委員として、天野政立、難波惣平、山川市郎、沼田初五郎、神崎正蔵(いづれも民権活動家)が出京した。とりわけ天野はこの運動の中心人物であった。天野・山川らは地租軽減有志者の総代として請願について坂崎斌方を訪問、この時同家に寄宿していた景山英子と面談し時勢を語り合い知己となった。

この渡韓計画の費用調達のため景山英子と富井於菟の二人は、明治十八年四月、荻野村を訪ねることになる。このとき景山と富井は、「不恤緯会社設立趣意書」(『市史』資料番号215)を作成して渡韓資金を天野らに依頼することとした。この趣意書は、資金調達のために作成されたものではあるが、女子教育の改良、所謂女権拡張を主張しており、景山・富井の根底にある女性の権利を男性と同等に拡張しようとする意図がみられる。この会社は景山英子が起こしたとその自伝に記しているが、下荻野難波家に残る趣意書は於菟の筆跡と見てよく、文末の署名が首唱者景山英・富井於菟の連署となっている。このことから、趣意書は景山英・富井於菟の二人で協力して作成したのである。

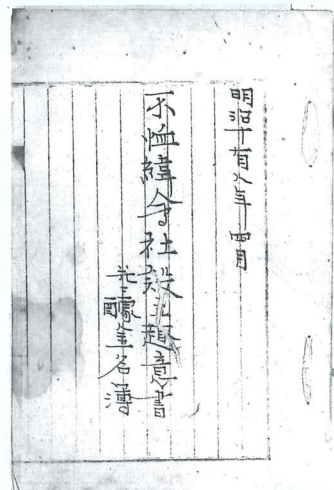


図3 「不恤緯会社設立趣意書并二釀金名簿」表紙

四月、二人は荻野村の天野政立を訪問、下荻野の松坂屋に止宿したが、『大阪事件関係史料集上巻』63頁、天野は生憎他行中で山川市郎に面接し釀金を依頼した(明治十九年一月十九日、大阪事件景山英子第七回訪問調書『大阪事件関係史料集下巻』28～30頁)。この資金調達は、三増(愛川町)・津久井(相模原市緑区)にも難波惣平を介して釀金を依頼しており、明治十八年五月八日付け、景山・富井から募集結果を尋ねる書簡を難波宛てに送っている(『市史』資料番号²¹⁾。しかし景山の訪問調書からは、三増・津久井からの釀金は確認できていない。景山・富井は、荻野だけでなく相州の民権家から幅広く資金募集を行ったことが推測される。

五 於菟の帰郷と再上京

於菟は、この計画に対する釀金があまりにも少ないため一旦郷里に帰り兄に依頼することとした。

二人の衣類を質に入れ旅費として帰郷した於菟の消息については再び『妾の半生涯』28～31頁から要旨を紹介する。

英子は於菟と別れて三十日を過ぎてても連絡がなく、さらに幾日か過ぎた頃、於菟から鉛筆書きの一通の手紙が景山のものにきた。手紙の冒頭に「ア、しくじつたり誤りたり、取餅桶に陥りたり、今日は最早や曩日の富井にあらず、妹は一死以て

君に謝せざんばあらず、今日の悲境は筆紙の能く尽す処にあらず、只々二階の一隅に推しこめられて日々為す事もなく恋しき東の空を眺め悲哀に胸を焦すのみ、余は記する能はず幸ひに諒せよ」と記されており、景山はようやく於菟の現況を知ることが出来たのである。

さらに九月初旬朝未明に、景山が借りている貸家に浴衣姿の於菟が訪ねてきて再会を果たした。この再会で景山は於菟の郷里での様子を詳しく聴くことが出来たのである。於菟は帰省して兄に資金援助の相談をしたが、全く聴き入れてくれず、二階の一室に閉じ込められ妹に看守させた。ようやく妹をすかして鉛筆を借りて手紙を出したとのこと。於菟はどうにかして上京して、この胸の苦痛を語り、その上で身の振り方を決めようと、妹より路費を借りて夜半寝巻のまま出奔した。郷里の家にはこれからは耶蘇教に身を委ねて志を貫かん、との手紙を残して上京した。私は最早同志ではない。約束に背く不義を咎めることなく長く交誼を許して欲しい、と景山に訴えた。景山は、「自らは道を変へつ、も尚ほ人のため国のために尽さんと、何たる清き心地ぞや。妾が敬慕の念はいと深くなりゆきたるなり。」と心情を吐露している。この上京が、於菟と景山との人生歩みを大きく変えることになった。

六 明治女学校と於菟

於菟は「耶蘇教に身を委ねて志を貫かん」として景山と別れてから、どのような人生コースを歩むのであろうか。於菟は、景山と再会を果たした後、明治十八年九月、キリスト教思想による女子教育を目的とする明治女学校の教員として教鞭をとることになる。

明治女学校は、明治十八年九月、キリスト教思想による女子教育のために木村熊二によって東京麹町区飯田町一丁目七番地に創立された。発起人は木村熊二、田口卯吉、植村正久、島田三郎、

巖本善治、木村熊二が校長に就任。教員は、木村熊二、津田梅、人見銀、富井於菟が充てられている。於菟は漢文学数学科の受持員である。於菟の教員履歴書を示しておく(『明治女学校の研究』782頁)。

教員履歴書

東京府下谷練堀町三十三番地

植村正久方寄留

兵庫県播磨国揖西郡龍野町千九十壹番地

兵庫県平民 富井於菟

十九年四ヶ年

漢文学数学科受持員

一明治十一年九月兵庫県下公立龍野中学校へ入学、同十四年九月卒業、同十五年九月兵庫県小学高等科教員免許状ヲ受ク

但シ營業賞罰訴訟等ノ關係更ニ無之候

明治十八年九月

右 富井於菟

この履歴書から、上京した於菟が著名な牧師である植村正久家(一八五七～一九二五)に寄留していたことが分かる。

於菟は明治女学校に教員として採用された心境を九月二十八日付けで兄定助宛てに手紙を送っている。要約すると、二十一日から、女学校に通勤し、授業を始めている。退校後も植村氏に就いて英語を学んでいる。校長木村熊二氏は十二年間米国に遊学し一昨年帰国、イーストレキは米国人教師、津田梅、植村季野(植村正久妻)、人見ぎん、島田まさ子(島田三郎妻)、木村とう(木村熊二妻)の履歴を述べ、教員は何れも歴々の学者であると記している。またこの女学校は、官立、公立、外国人の設立でもなく、少数の有志者の寄付金によって成り立っている。当分の間は無給無謝である。私等には現在車代として一ヶ月三円が支給されている(『龍野市史』第六巻202～204頁)。

以上のように、於菟が新たに明治女学校に奉職し、希望に満ちた心境の手紙文である。於菟は漸く明治女学校で漢文学数学科受持員として、活躍の場を得た。しかし僅か三か月後、腸チブスに罹り他界してしまふのである。

一方、景山英子は、渡韓計画による渡航について明治十八年十月に於菟に手紙を送り、思い残す事なしと記している（『妾の半生涯』31頁）。於菟はおそらく英子の実行計画をこの手紙で知ったのである。翌十一月二十三日大井憲太郎らによる朝鮮改革計画が発覚し、景山も逮捕拘禁される。於菟は十一月二十六日に腸チブスに罹患しており、果たして死の十日前のこの事件報道を知ったであろうか。

七 於菟の死

於菟は明治十八年十二月二日夜、東京大学第一医院にて死去する。その死亡原因を「木村鏡子の伝」（『明治女学校の研究』802頁）が伝えているので、抄録して紹介する。

「女学校の教員人見銀子、嘗て腸窒扶斯を病みて、殆んど死せんとせしに、鏡子、同教員富井於菟子と共に之を看護して為めに快癒に向ふに際し於菟子之に感染し其病勢更に劇なりければ、人或ひは鏡子の此疾に罹らん事を患へたりしに、鏡子顧みずして曰く死生命あり、且於菟子遠方より来りて親戚の依るべき者なし、今同く校員の列に居

れり、我に非らずんば誰れか之を看護する者ぞと奮て湯薬の事を執りしも、不幸にして遂に死したりければ、鏡子熊二氏を助けて葬儀を営なみ、厚く其生前教育の労を謝せり」

とあり、於菟が同僚の看護中に腸チブスに罹患し不帰の人となつてまつたこと、葬儀は木村熊一、鏡子等学校関係者の手によつて執り行われたことが記されている。

次に、富井於菟の死亡記事を『東京横浜毎日新聞』から紹介しておこう。

○富井お菟子の葬式 明治女学校の教員富井お菟子ハ腸窒扶斯病に掛り、去二日夜東京大学第一医院に於て死去せり、子ハ播磨国揖西郡龍野の人なりしが、夙に有為の志を懐きて東京に來り、近時明治女学校の教員となりて婦人社会の改良と教育とに意を傾けしが、志未だ成らずして卒然遠く黄泉に赴きたり、干時行年二十有一、一昨日谷中天王寺に葬る、朋友故旧生徒等会葬する者甚た多く、何れも玉樹を埋めたることを悼傷せずハあらじと（『東京横浜毎日新聞』明治十八年十二月五日 第一面 第四千四百九十九号）

葬儀には朋友故旧生徒等会葬する者甚た多く、参列したと記している。なお、明治女学校は、資金難のため、明治四十一年十二月最後の卒業式が行われ、廃校した。

そして盟友景山が於菟の死を知るのは、大阪事件公判中である。『妾の半生涯』51頁で於菟の訃報を次のように記している。

「女史の訃音 夫より数日を経て翌廿年五月廿五日公判開廷の際には、恰も健康回復の期にありて、頭髮悉く抜け落ち、薬缶頭の醜さは人に見らるゝも恥かしき思ひなりしが、後にて聞けば妾の親愛なる富井於菟女史は、此時娑婆にありて妾と同病に罹り、薬石効なく遂に冥府の人となりけるなり。扱ても頼みがたきは人の生命かな、女史は妾等の入獄せしより、只管謹慎の意を表し、耶蘇教に入りて、伝道師たるべく、大に聖書を研究し

居たりしなるに、迷心執着の妾は活きて、信念堅固の女史は逝きぬ。逝ける女史を不幸とすべきか、生ける妾を幸といふべきか、此報を聞きたる時、妾は実に無限の感に打たれにき。」

と景山英子は感慨を述べている。

現在、於菟自身の記した伝記・記録が少ない中で、その実像を描き出すのは難しい。於菟の一生は家族の限界性を背負いながら、困難に立ち向かう姿が想起される。果たして一回限りのかけがえない人生の一部分でも描くことが出来たのか、甚だ心もとない。もしかしたら於菟が英子と共に相州荻野村に來村した時が、自由で最も生き生きと輝いた瞬間なのかも知れない。

今後、明治十年代を駆け抜けた於菟のさらなる研究がなされることを願つて止まない。

主な参考文献

- 『龍野市史』第三卷 龍野市発行 昭和60年3月1日
- 『龍野市史』第六卷 龍野市発行 昭和58年3月1日
- 『明治女学校の研究』青山なを著 慶応通信 昭和45年1月20日
- 『明治女学校の世界』藤田美実著 創青英社 昭和59年10月27日
- 『富井於菟小伝』（『播州平野にて』） 内海繁文学評論集 未来社 昭和58年
- 『妾の半生涯』福田英子 創岩波書店 昭和33年4月25日
- 『大日本人名辞書』経済雑誌社 明治19年2月
- 『大阪事件関係史料集上・下巻』 日本経済評論社 昭和60年11月20日

厚木市史たより 第26号

令和4年（二〇二二）3月15日発行
編集 厚木市教育委員会文化財保護課
発行 厚木市
住所 神奈川県厚木市中町三一七―一七
電話 〇四六・二二五・二〇六〇
FAX 〇四六・二二三・〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しております。



図4 墓碑拓本
（『龍野市史』第三卷所収）